

ある休日の朝。

あなたが自宅リビングに出ていくと、難しそうな顔をしたヒメコとリンカが向かい合っていた。

「あ、お目覚めでしたか。上がらせてもらっております」

「三人揃ったことじゃし、朝飯にでもするか」

ヒメコは手慣れた様子でダイニングのテーブルを拭き、リンカは料理をどこからか出現させてそれらを並べる。

彼女はなるべく、あなたの前では料理を作るところも見てもらいたがる。

逆にそうしないときは、大抵の場合多忙なのだ。

「本日はハムエッグを作って参りました」

「ああ、うまそうじゃ……いただいてもよいか？」

「勿論でございます。さあ、食べながらお話の続きをしましょう」

とりあえず、朝食が始まる。

四枚切りの厚みのある食パンが、見かけによらず破壊力のある卵とハムのコンビを受け止める、満足感のある朝食だ。

「さて、お主にも話しておくべきじゃな……」

「ええ、大変な事態です」

「実はこの凝束村、危機的状況に陥っておるのじゃよ。それも、差し迫った、な」

差し迫った、というのは人口減少が理由ではないということを暗示しているのだろう。

「この村の半分ほどの土地を使って、メガソーラーを作るという話が持ち上がっているのです」

メガソーラー。

昔は僻地の自然破壊といえばダムだったが、今ではやはりメガソーラーだ。

ダムと比較したときに、公益性の薄さもあって、世間的にもかなり嫌われている。

「農らとしては、なんとしてでもそれは阻止せねばならん。この大地主が、メガソーラーを作りたがってる輩に土地を売り渡すのを阻止できれば、どうにかなるはずじゃ」

ヒメコとリンカには力がある。

これを生かせれば、反対運動をする手間も必要ない上確実だ。

だが、あなたは二人にどれほどの力があるのかを量りかねていた。

「私としても、強引な手段は好みません。土地を買いつけようとしている方を少々脅かして、諦めていただこうかと思っているのです」

それが『強引な手段』でないというのなら、手段を選ばない二人は一体なにをしてしまうのだろうか？

あなたは彼女らの底知れなさを再び感じる事となった。

「しかしじゃ、この作戦には一つ障壁がある」

その土地を買いつけようとしている人物に、どうコンタクトを取るのか、であろう。

あなたはその思考を伝えたが、返事は意外なものだった。

「いえ、それについては問題ありませんよ」

「今度、この村を視察に来ることが分かっておるからな。そのときに『食らわして』やるのよ」

ヒメコは食事中的空いた左腕でフックを打ってみせた。

喩えであることを願いたい。

「それで問題のことなのですが、私ども……あまり妖力を溜め込んでいないのですよ」

「夏祭りのときにはぱーっと使うが、それ以外じゃほとんど使うこともないからのう」

「そこで、どうにか妖力を確保しなければなりません」

「そこで、お主に協力して欲しくてな。少々面倒なことも頼むが、よいかの？」

あなたは嫌な予感を覚えた。

だが、この二人の頼みを無下にすることもあなたにはできなかった。

あるいは、この村への愛着がそうさせたのかもしれない_____とにかく、あなたは首肯した。

「ふふ、あなた様にならそう言っていただけたらと思っておりました」

「では、朝食を終えたら早速始めるとするかな……」

あなたたちが朝食を終えると、ヒメコはあなたを自身の社へと連れ込んだ。

リンカの社は驚くほどに殺風景だったが、ヒメコの社は前回来たときと同様、様々なものが置かれている。

「準備、お手伝いしましょうか？」

「いや、構わぬ。服でも脱がせておいてくれ」

「分かりました。では、失礼して……」

部屋に置かれている棚から、ヒメコは様々な物体を取り出している。

謎の粉末や盃、線香のような物体や巻物……正体不明の品々が出てくる。

ぼうっとそれを見ていると、あなたはリンカによってあっという間に全裸にひん剥かれてしまった。

「さて、始めようか。まずはこれを飲め」

ヒメコはあなたに盃を渡す。よく澄んだ水が入っており、溢してしまいそうだ。

あなたはゆっくりとそれを飲み干すことだろう。

「これは？」

「あれは体内の気の巡りをよくする水じゃ。こいつを飲ませねば、ヒトから妖力を得る効率はかなり低くなってしまう」

「ヒメコ様、なんでも持ってますよね」

「断捨離が下手なだけじゃ。さぁお主よ、そこの布団にうつ伏せになれ」

どんどん儀式じみていく。

あなたがうつ伏せになろうとしているときにも、ヒメコは先ほど出した線香のようなものに火を点けている。

「これもきっと、必要なものなんだろうね……」

嗅いでいると落ち着かなくなるその香りが漂い始めると、ヒメコはあなたへ馬乗りになった。

そして、その体に手を這わせ、マッサージを始めたのだった……

「くく、どうじゃ？熱が高まってきたじゃろ？」

ヒメコの手つきは非常にいやらしいものだった。

最初は全身の凝りをごく優しく解していたのに、気付けば鼠径部を焦らすように弄られ、乳首もねっとりと擦られ、どんどん興奮を高められていってしまう♡

あなたは快楽を求め、節操なく身をくねらせていた♡

「え……エロすぎますっ……♡あなた様♡誘っておられるのですかっ♡」

近くで見ていたリンカも、これには大興奮。

いまにも自身の股ぐらを弄り始めそうだった。

「よし、お主よ……腰を上げるのじゃ。肘をついて四つん這いの体勢じゃぞ」

あなたは腰をくいと上げる。

伴って、布団に押しつけられていた肉棒が解放された。

そして、ヒメコは続ける。

「リンカよ、こやつのちんぽ……好きにしてよいぞ」

「まあ♡ありがとうございますヒメコ様♡では早速……♡」

リンカはあなたの両脚の間に入り込むと、下からペニスにむしゃぶりついた♡

「くく♡マッサージは続けさせてもらうぞ……♡」

ヒメコはあなたの正面側から全身をまさぐり続ける♡

一方で、その股間には待ち望んだ快楽が与えられていた♡

「ずじゅるるっ♡んむっ♡んむっ♡んふうっ♡じゅぞっ♡じゅるるるっ♡」

端正な顔をいやらしく歪ませ、凄まじい吸引刺激を発しながら、リンカはあなたのモノをいたぶる♡

そのあまりの快楽にあなたは天を仰いでひたすらに喘ぐしかない♡

「お主はもう射精のことしか考えられず、リンカは精飲のことしか考えられぬ♡堕ちたな♡性欲のるつぼに……♡」

ヒメコがフェザータッチであなたを愛撫し、その手が突如として乳首をつねる♡

それと同時にリンカのフェラも激しくなり、唇で強くカリを締め上げられる♡

あなたは突然の責めに歓喜し、無様にそのおちんちんから白濁を暴発させた♡

「んぶうっ♡んふうっ♡んんんっ……♡」

ヒメコは恍惚の表情となり、あなたが漏らした精を鼻息荒く飲み続ける♡

たっぷりと焦らされたために、普段の五割増しほどの精が出た♡

「よし、リンカ……一旦そやつの後ろに回れ」

「んくっ……はい……♡」

リンカはあなたの突き出されたお尻をじっと見る体勢になった。

間髪入れず、あなたの正面側からヒメコがあなたの股間の下に滑り込む。

「さっきの射精で、多少妖力を回復したじゃろう？」

「ええ、お陰様で……♡」

「儂がちんぽをしゃぶり始めたら、こやつの前立腺を妖力を込めてつついてみよ」

「……？分かりました」

よく分かっていないようだったが、リンカはそれを承諾した。

射精の余韻でろくに二人の会話も聞けていないあなたは、ヒメコによって再び陰茎をしゃぶられ始める♡

「んじゅるっ……♡にゅぽ♡にゅぽっ♡にゅぽぽっ♡ずじゅ♡じゅぶぶっ♡」

それを確認したリンカは、舌先に妖力を込め、あなたの菊門へとそれを差し込む。

あまり慣れていない快樂に翻弄されるあなただったが、肛門のことばかり考えてはいられないほどヒメコの口淫はねちっこく濃厚だった♡

心を奪われてしまいそうなほど情熱的なフェラに、あなたはまたしても声を上げる♡

「るれ……れろ……ん、ほほれふね……♡」

そして、リンカの舌先があなたの前立腺を捉えた。

その瞬間、あなたの全身を電流のごとき圧倒的快感が駆け巡る♡

それはあなたのそこが敏感だからでも、リンカのテクニックが優れているからでもない♡

「んぶうっ♡んんっ♡んふう〜っ♡」

ヒメコがマッサージであなたの気の流れを開いたためなのだ♡

最後の一押しが、妖力で前立腺を刺激することだったのである♡

あなたは二人の手によって妖力ザーメンサーバーに改造され、壊れた蛇口のようにひたすら精をびゅるじゅると吐き出し続ける♡

「んぐっ♡んぐっ♡んぐうっ♡んんっ……♡」

ヒメコは貪欲に、さらに深く射精中のモノを咥え込む♡

ごきゅっ♡ごきゅっ♡と精を飲み下すその喉で、容赦なくあなたのそれを締めつけ、
終わりのない射精の中で放出感以上の追い討ち快楽をぶつけてくるのだ♡

「ひ、ヒメコ様っ！？これは……！」

リンカ言葉にも応えず、ヒメコはひたすらに精を飲んだ♡

だが、射精も三分ほど続けばついに収まってしまった♡

「っぷはあ～っ……♡こ、こりゃあ……酔っぱらってしまいそうじゃな……♡」

ヒメコはあなたの股の間から抜け出す。

そして彼女が優しくあなたの腰を押すと、全身から力が抜けてあなたは突っ伏してしまうことだろう。

「あの、ヒメコ様？」

「おお、悪いな……まあ、これで下ごしらえは終わりじゃ」

「下ごしらえですか」

「もうこやつは、前立腺を小突いてやれば体内の栄養を妖力に変換して射精する……増幅と変換を行う装置となったのよ♡」

精を妖力とできる……それはあなたも知っていたことだ。

だが、その効率が1だとすれば、充分な手順の元、ミルクサーバーとなったあなたの効率は100をも超えている。

「そ、それはそれは……確かに、今のヒメコ様からは凄まじい妖力を感じます」

「これから毎日、お主にはたらふく食ってもらうからな♡そして、儂のマッサージを受けて……ぶりゅぶりゅ射精してもらうぞ♡」

そうして、あなたたちの狂ったような日々が始まった。

リンカが贅を尽くした料理をあなたに提供し、栄養を蓄えたあなたはひたすらに搾られる♡

今日もあなたは、二人と交わる……

「さぁお主っ……♡儂のほとに、そのぴく♡ぴく♡と震えるモノを突っ込んでくれ♡」

思春期の男子なら中毒になってしまうような甘美なる射精の快感♡

それが分単位で持続するあの感覚を知ってしまったあなたには、もはや挿入をためらうこともできなかった♡

「くはぁっ♡きたっ♡おちんぽがっ……♡挿入ってきておるぞっ♡」

ヒメコの乱れる顔が呼び水となって、あなたは激しいピストンを始める♡

責めているのはあなたのはずなのに、あなたのほうがはるかに必死だった♡

「あっ♡はぁっ♡よっ♡よいぞっ……♡もっとじゃ♡もっと奥を突け♡ほれっ♡ほれ♡」

ヒメコはその両脚でしっかりあなたの腰をホールドすると、蕩けた顔でさらなる責めをねだる♡

あなたは高まる快楽に喘ぎながらも、ただ彼女の言葉に従って腰を振る♡

「おっほおっ♡たまらぬっ♡やっぱりお主のモノは極上じゃなっ♡」

「リンカっ♡もうよいぞっ♡」

リンカは『このまま放っておいたらヒメコ様めちゃくちゃに乱れるのでしょうね…』という内心を呑み込み、優しくあなたの肛門に指を通して、前立腺をつついた。

「んぎっ♡」

強制絶頂♡

一瞬にしてあなたの脳内はスパークし、とろけるような淫肉絡みつく、ヒメコの膣内への放出運動が始まる♡

「くく♡牛の乳搾りの要領で……っ♡すっからかんにしてやるわっ♡」

射精中も、ヒメコの膣内はいやらしく蠢く♡

根本から先端へと、絵の具のチューブを絞るような責めが、お漏らしの勢いをさらに高める♡

「こっちでも吸ってやろう♡んちゅうっ♡」

さらに濃厚な口づけまでもを交わしてくる♡

モノを搾られながら口内をいやらしくくすぐられ、あなたはとろけ顔でされるがまだ♡

「んじゅるるっ……じゅ……るれろ……ん♡」

「んふううう……ぷはあっ♡今日はこの辺にしといてやる♡」

ようやく射精が止まった♡

あなたの気の巡りはどんどん良くなり、結果として射精の時間もだんだんと伸びている♡

「明日はリンカじゃ♡お主も、ゆっくりと今日は休めよ♡」

結合部から垂れた精で水溜まりを作りながら、ヒメコは笑った。

翌日。

「はぁぁっ♡もっ♡もう我慢できませんっ♡」

そのときが来ると、リンカは眼を血走らせながらあなたを組み伏せた。

ヒメコの性感マッサージで切なげにしているモノを容赦なく掴み、上からあなたのそれを犯す♡

「昨日からずっと昂りっぱなしなんですっ♡お覚悟をっ♡」

種搾りプレスの体勢となったリンカは、激しい杭打ちピストンであなたを犯す♡

完全に動けない状態で、ペニスの先端が子宮口に何度も潰される♡

「はぁぁ♡先走り汁からもう妖力が漏れておりますよ♡私に全部捧げたいのですよねえっ♡」

リンカは狂信的に瞳をぎらつかせながら、貪るような腰遣いであなたを責める♡

しかし乱暴さの中にもどこか優しさがあり、気持ちよすぎて苦しいというほどではなかった♡

彼女自身が言うように、その絶妙な快樂で自分から精を捧げたいと思うように_____虜にされつつあったのだ♡

「ふふ♡そろそろお射精が近いですか♡その、とろんとした目を見れば分かります♡すっかり夢見心地ですねっ♡」

思考にかかった靄が深くなる♡

なにもかも全てリンカに委ねてしまいたいという欲求であなたは満たされる♡

「ぜんぶ受け止めて差し上げますからね♡優あしく……♡ねっとりと……♡お気の済むまで……♡」

「さぁ、ヒメコ様♡」

彼女が合図すると、ヒメコは満足げに微笑む。

そして、種搾りプレスの体勢であるために無防備に放り出されたアナルに指が滑り込み、一瞬にして前立腺に辿り着かれる♡

「きひいっ♡」

ダマのようなそれが膣奥に叩きつけられると、リンカは撫子ぶっている女性が上げてはならない嬌声を上げた♡

「はあああ〜っ……♡どくんどくん流れ込んできますうっ……♡あなた様のっ♡お精子っ♡」

ヒメコの搾り尽くすような責めとは異なり、リンカは射精中にはむしろさらに膣内をふわとろにして、自分から射精したくなるように促している♡

「ほおら、これも啜えてみてください♡もおっと蕩けられますよ……♡」

リンカはあなたにそのたわわな乳房の先端を差し出す♡

熱に浮かされたようにしゃぶりつくと、その瞬間からあなたの脳内に多幸福感が流れ込んでくる♡

あなたはリンカの乳を吸い、リンカに精を吸われながら永劫にも感じられるような時を射精しながら過ごした♡

「……そろそろ打ち止めですかね♡」

あなたが射精を終えると、リンカは乳首をあなたから優しく取り上げて、あなたを仰向けに寝かせた。

そして、見ていたヒメコの元へ向かう。

「どうじゃった？」

「責めたり責められたりもいいですが……これも中々……♡」

それから数日間、この爛れた儀式は続けられた。

そんなある日、満足げな表情で二人が本殿に入ってきた。

「いやあ痛快痛快！」

「あなた様、『やるべきこと』は終わりましたよ」

どうやら、メガソーラー計画を防ぐことに成功したようだった。

あなたには今朝からずっと、社の外でなにか大きなものが蠢くような音や、軍隊の行進かと思うような大量の足音が聞こえていた。

他にもありえないような異音がたびたびしていたが、それらは全て二人の仕業だったということだ。

「リンカの動きぶりは見事じゃったぞ！かような大掛かりな幻術、初めて見たわ！」

「ヒメコ様も、お一人であそこまでの分身を出せるなんて驚きでした」

二人が一体なにをして、視察に来た人にはたらきかけたのかは、怖くて聞くこともできないだろう。

どう返事したらいいのか逡巡していると、また話しかけられる。

「さて……お主にもひとまず、元の生活に戻ってもらおうぞ」

「ですが、その前に……二つほどご用件が」

「まず一つじゃが、お主が望むならまた、この生活を始めることができる。そして、これを長く続けるとお主は次第に若返り、ついにはヒトを超越する」

ヒトを超越、という謎のフレーズ。

あなたは思わずそれについて聞くだらう。

「仙人のようになる、ということです。私の故郷には少なからずおりました。気の巡りを極めれば、最後にはそうなるのです」

「それともう一つ……ふふ♡」

二人は妖しい笑みを浮かべて服を脱いでいく。

すっかり調教されきってしまったあなたは、それだけで股間が熱くなってしまうことだろう。

「一気に妖力を吐き出したからのう……渴いて渴いて仕方がない♡」

「前立腺を突かなければ、小分けにして何度もえっちできますからね……♡」

後ずさりしてもついには布団に追いつめられ、あなたの両サイドに二人がつく。

あなたはその夜も、享樂の宴に溺れるのだった……